person 4
津田幸男さん
Tsuda Yukio
オカリナ教育作家
手づくりオカリナ支援の会

大阪から単身東北へ 手作りの音色が心を癒やす

千厩町千厩の津田幸男さん（63）は大阪の出身。２０１２年末、オカリナ片手に単身東北入りし、被災者の心のケアをサポートしている。小学校教員を退職後、関西の大学で講師を務めるなど、長年、図工・美術教育に携わってきた。

ところが、11年に糖尿病をわずらい、仕事をリタイア。生きがいを失い、人との交わりを拒む日々が続いた。そんなある日、震災で家族を亡くした女児のドキュメンタリーを見た。

この生活から再起できるのなら、オカリナをつくって届けたい――

脱皮を決意する瞬間だった。それから1年間、オカリナづくりに没頭、納得のいく音色を生み出した。

被災地の支援活動とはいえ、個人の活動だ。歓迎されないことも少なくない。だが、岩手は違った。宿を提供してくれたり、交流活動を支援してくれたり、幸男さんの活動を心から応援してくれた。

「困っている人を放っておけないのが岩手人。それが、復興にも生かされている」

誰かのために頑張ることの素晴らしさを岩手で知った。「オカリナで、感動を伝えたい」と一関で決意した。

幸男さんは、オカリナづくりや演奏体験を通して、子供たちの心をケアしている。

「心に響くものを届けたい」活動は始まったばかりだ。

person 5
細川雅彦さん
Hosokawa Masahiko
防災教育を進める小学校長
室根西小学校

苦難を乗り越えてきた姿を「生き抜く力」を育む力に

1_防災学習の様子／2_津波で打ち上げられた巻き網漁船「第18共徳丸」の前で黙祷する室根西小児童ら

本年度「いわて復興教育推進校」に指定された市立室根西小学校（細川雅彦校長、児童１００人）。綿密なプランニングの下、「生き抜く力」を育むために教員、児童、保護者が一体となって「復興教育」に取り組んだ。

あらゆる状況を想定した防災訓練や復興教育を実施。被害を自分の目で見て、津波に襲われた人が実際どうやって生き抜いたかを知った。壊滅的な被害から復活を遂げた水産業者から、苦難を乗り越える力とは何かを学んだ。昨年10月には、「気仙沼市唐桑町の畠山重篤さんの葛藤と古里を思う心情を題材にした創作劇」と「藤原清衡が戦乱の東北に自立と平和をもたらした歴史を震災復興に重ねた創作劇」を「復興劇」として披露した。

細川校長は「子供たちは、仮設住宅の人たちと交流したり、被災地を取材して、見たり、聞いたり、活動したりしながら『生き抜く力』について考え、『助け合うこと』の素晴らしさを知った」と振り返る。つらく悲しい面だけがクローズアップされがちな震災だが、「そこには『希望』や人間が持つ『可能性』の素晴らしさなど『復興の光』が必ずあることを学んでほしかった。子供たちは、それをつかんでくれた」と達成感に満ちた表情を見せる。

同校は引き続き、▼被災地の訪問▼仮設住宅との交流▼防災訓練の実施▼道徳や総合的な学習・教科学習での学び―を徹底し、未来の担い手を育んでいく。

person 6
塩竈一常さん
Shiogama Ichijo
ラジオパーソナリティー
一関コミュニティFM

普段のつながりが災害時に電波という名の命綱に

ラジオは、停電時でも電池があれば機能する。東日本大震災では、テレビや電話などあらゆる情報インフラが遮断された中、災害発生直後から住民に必要な情報を発信。住民から「地域になくてはならないメディア」として認知されている。

東日本大震災と岩手・宮城内陸地震、二つの大地震で被災した一関市は防災ラジオの役割も果たす「コミュニティFMの早期開設が必要」と判断。計画を前倒しして、昨年4月29日に一関コミュニティFM「FMあすも」（村上耕一社長）を開局した。「DAILY I-Style」や「GETKING!!」でおなじみの塩竈一常さん（34）は、あすものパーソナリティー。二つの震災時には、おとなりの奥州エフエムに務めていた。

奥州エフエムは、地震発生直後から8人のスタッフがフル稼働、番組編成を切り替えて災害情報を伝えた。テレビも電話も使えない中で、リスナーから寄せられる情報を住民目線で発信。どの地域がどんな状況なのかを伝えたほか、安否確認の伝言板機能も果たすなど、24時間体制で放送した。

「電気も電話も使えない不安の中、リスナーの皆さんが情報提供してくれました。発生の一報から復旧情報まで寄せられた情報は数千件。その多さに、みんなで危機を乗り越えようとしている力を感じました。一人ではなく一つだって思いました。災害情報はもちろん、道路、お店、病院、学校や幼稚園の情報なども繰り返し伝えました」と振り返る。

20歳の時、たまたま訪れた大阪府守口市のFM局で「退職者がいる。明日から来て」と誘われ、ラジオの世界へ飛び込んだ。同局は、阪神・淡路大震災の発生時に、近畿地方で唯一開局していたコミュニティFM局。そこで人と人とのつながりの大切さや地域を元気にするラジオの底力を学んだ。

一常さんには「地元の人間が伝えてこそ、リスナーも励まされる」という信念がある。古里一関にエフエムが開局すると聞き、「それなら自分が」と決意した。「知っている顔、知っている声、それだけで普段は親近感がわきます。災害時には安心感を得られます」

震災を経験し、あらためてラジオの力を感じたという。

「電波を通して人や地域をつなぐことが僕たちの使命。普段のつながりが、災害時の命綱になります。広い一関も、足元からつないでいけば、きっと一つになれるはず。その役割をあすもが果たしたい」と力を込める。

電波には無限の可能性がある―。守口時代からずっと信じてきた。まだまだ先が見えない震災復興にも「きっと貢献できるはず」と前を見る。

「10年かかるか20年かかるかわからないけど、元気な古里を取り戻すまで、一人一人に笑顔が戻るその日まで、電波を通じて支えていきたい。やさしくてあったかい、みんなの心に寄り添う存在でありたいです」

●臨時災害FM局

東日本大震災では、岩手、宮城、福島、茨城の各県で開局。それぞれ地域に密着した災害情報を放送した。最初に開局したのが奥州（最大出力150W）で、震災発生翌日の12日に電話で申請し、即日免許が発行され、周波数が割り当てられた。

あの日以来、「頑張ろう」とか「一つになろう」というメッセージや広告を目にする機会が増えた。被災地だけでなく日本中でだ。苦しい時やつらい時に、助けてくれるのは人。人と人とのつながりこそ大切だからだろう。

さまざまな立場の人を取材した。共通していたことは、今を一生懸命生きていること。未来を信じて前に進んでいること。心を寄り添って共に歩いていること。その人といると、やさしい気持ちになれる。元気がわいてくる。一人じゃない、そう思えてくる。

物資の配布やがれきの処理で大量の人員を必要とした震災直後から、心のケア、自立支援、そして再建支援へと被災地が求める支援のニーズは変わってきている。これまで以上に被災者の声に耳を傾け、被災地が必要とする支援を届けたい。

市は3・11を「となりきんじょ防災会議の日」に制定した。心に深い傷を負った一方で、決して忘れてはならないことがあるからだ。必ず伝えなければならないことがあるからだ。大切な人の未来に自分がいるために、自分の未来に大切な人がいるために、家庭、職場、地域で話し合おう。その先に光は見えてくる。